

博多 164

－博多遺跡群第 214 次調査の報告－

2019

福岡市教育委員会

博多 164

－博多遺跡群第 214 次調査の報告－



調査略号 HKT-214
調査番号 1711

2019

福岡市教育委員会

序

古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、数多くの文化財が残されています。その中でも福岡平野には福岡の歴史を考える上で重要な遺跡が数多く残されています。これらの文化財を保護し、後世に伝えることは本市に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあるのも事実です。福岡市ではそのような開発によってやむを得ず失われていく遺跡について事前に発掘調査を行い記録保存に努めています。

本書は、共同住宅建設に伴う博多遺跡群第214次発掘調査について報告するものです。この調査では、古代末から中世にかけての集落を確認することができました。これらは博多遺跡群の解明のためにも重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後に DM 都市開発九州株式会社様をはじめとする多くの関係者の方々には、発掘調査から報告書刊行に至るまで、ご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

平成31年3月26日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

例言

1. 本書は、福岡市博多区冷泉町 446、448 における共同住宅建設に先立ち、福岡市教育委員会が平成 29 年 6 月 30 日から平成 29 年 10 月 3 日にかけて発掘調査を実施した博多遺跡群第 214 次発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は上記の主体により行われ、調査は福岡市埋蔵文化財課の山本晃平が担当した。
3. 報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
4. 本書に掲載した遺構の実測図作成は、山本が行った。
5. 本書に掲載した遺物の実測図作成は山崎賀代子、山本が行った。
6. 本書に掲載した遺構と遺物の写真撮影は山本が行った。
7. 本書に掲載した挿図の製図は山本が行った。
8. 本書で用いた方位は座標北である。
9. 本書で用いた座標は世界測地系による。
10. 調査で検出した遺構については通し番号を付している。
11. 本書では陶磁器の分類については太宰府市教育委員会 2000『太宰府条坊跡 X V - 陶磁器分類編一』を参考にした。
12. 本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管され、活用する予定である。
13. 本書の執筆・編集は山本が行った。

博多遺跡群第 214 次発掘調査基本情報

遺跡名	博多遺跡群	調査次数	第 214 次	遺跡略号	HKT-214
調査番号	1711	分布地図図幅名	049	遺跡登録番号	0121
申請地面積	265.73 m ²	調査対象面積	157.57 m ²	調査面積	92 m ²
調査期間	平成 29 年 6 月 30 日～平成 29 年 10 月 3 日	事前審査番号	28-2-779		
調査地	福岡市博多区冷泉町 446、448				

本文目次

第1章 はじめに ······	1
1 調査に至る経緯 ······	1
2 調査の組織 ······	1
3 遺跡の位置と環境 ······	2
第2章 調査の記録 ······	9
1 調査の概要 ······	9
2 遺構と遺物 ······	9
1) 井戸 ······	9
2) 土坑 ······	14
3) その他の遺構出土遺物 ······	22
4) 瓦 ······	24
5) 土製品 ······	25
6) 石製品 ······	25
第3章 まとめ ······	27

挿図目次

第1図 博多遺跡群周辺遺跡分布図 (1/25000) ······	3
第2図 博多遺跡群調査地点位置図 ······	4
第3図 博多遺跡群第214次調査地点位置図 (1/500) ······	5
第4図 博多遺跡群第214次調査調査地點 調査区分け (1/100) ······	6
第5図 博多遺跡群第214次調査 第1面全体図 (1/100) ······	7
第6図 博多遺跡群第214次調査 第2面全体図 (1/100) ······	8
第7図 井戸037実測図 (1/60) ······	9
第8図 井戸037出土土器 (1/3) ······	10
第9図 井戸048実測図 (1/60) ······	11
第10図 井戸048出土土器 (1/3) ······	11
第11図 井戸063実測図 (1/60) ······	12
第12図 井戸063井筒出土土器 (1/3) ······	12
第13図 井戸063掘方出土土器 (1/3) ······	13
第14図 土坑091実測図 (1/20) ······	14
第15図 土坑091出土土器 [1] (1/3) ······	15
第16図 土坑091出土土器 [2] (1/3) ······	16
第17図 土坑068実測図 (1/40) ······	17
第18図 土坑068出土土器 (1/3) ······	17
第19図 土坑101実測図 (1/40) ······	18
第20図 土坑101出土土器 (1/3) ······	18
第21図 土坑112実測図 (1/40) ······	19

第22図	土坑112出土土器(1/3) ······	20
第23図	I区その他遺構出土土器(1/3) ······	21
第24図	II区その他遺構出土土器(1/3) ······	22
第25図	出土瓦製品(1/4) ······	23
第26図	出土土製品(1/2・1/3) ······	23
第27図	出土石製品(1/3・1/4) ······	24
第28図	出土玉製品(1/1) ······	25

図面目次

- 図版1 写真1 I区1面全景(西から)
 写真2 I区2面全景(南西から)
 写真3 II区1面全景(南東から)
 写真4 II区2面全景(南東から)
- 図版2 写真5 井戸037(北東から)
 写真6 井戸048(南東から)
 写真7 井戸063(北東から)
 写真8 土坑091(西から)
- 図版3 写真9 土坑091 土師器皿(1)
 写真10 土坑091 土師器皿(2)
 写真11 土坑091 土師器皿(3)
 写真12 土坑091 土師器坏
- 図版4 写真13 井戸048出土土器
 写真14 井戸063出土土器
 写真15 井戸068出土土器
 写真16 土坑101出土土器

第1章 はじめに

1 調査に至る経緯

平成28年12月8日付で福岡市博多区冷泉町446,448の共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無の照会文書が福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課（平成30年度から文化財活用部に変更）に提出された。照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群に所在し、周辺の確認調査、発掘調査において遺跡の存在が確認されている。そのため当該地にも埋蔵文化財が存在している可能性が高いと判断し、平成29年3月27日に確認調査を行った。その結果、地表面から180cm下で中世以前の遺構と遺物を確認した。これらから埋蔵文化財課では、遺跡保全に関して申請者と協議を行った。

その結果、共同住宅建設において埋蔵文化財への影響が回避できないことから、記録保存のために発掘調査を実施することで合意した。そして平成29年6月23日付で事業者であるDM都市開発株式会社を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年6月30日から発掘調査を行い、10月3日に終了した。

2 調査の組織

調査委託：DM都市開発株式会社

調査主体：福岡市教育委員会（発掘調査：平成29年度、整理報告：平成30年度）

調査統括：経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課

課長 常松幹雄（29年度）

大庭康時（30年度）

調査第2係長 大塚紀宜（29・30年度）

調査庶務：文化財活用課管理調整係

管理係長 藤克己（29・30年度）

松原加奈枝（29・30年度）

事前審査：経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課

事前審査係長 本田浩二郎（29・30年度）

主任文化財主事 池田裕司（29年度）

田上勇一郎（30年度）

文化財主事 中尾祐太（29年度）

朝岡俊也（30年度）

調査・整理担当：同課

文化財主事 山本晃平（29・30年度）

3 遺跡の位置と環境

博多遺跡群は、中世都市「博多」を主として、弥生時代から近世、さらに近代までに至るまで連綿と続く複合遺跡である。本遺跡群は、玄界灘に面する博多湾岸に形成された古砂丘上に位置しており、現在の博多川と石堂川（御笠川）、南は石堂川の開削以前に那珂川に向かって西流していた旧比恵川によって画されている。本遺跡群の立地する砂丘は大きく3列に分けられており、内陸側から砂丘I、砂丘II、砂丘IIIと呼称されている。これらのうち砂丘Iと砂丘IIは「博多浜」、砂丘IIIは「息浜」と呼称される。砂丘Iと砂丘IIは南西側から北東側に延びる狭長な谷部によって区別され、砂丘IIIは砂丘IIの前面に遡れて形成された砂丘である。

博多遺跡群の遺構の形成は、少なくとも弥生時代早期には始まり、そのち近現代まで連綿と人間の生活痕跡が継続されている遺跡である。弥生時代は少なくとも中期初頭以降は、主要な分布域の移動はあるものの、後期及び終末期まで継続している。弥生時代中期中頃から中期末には甕棺墓列も形成され、終末期には遺構が増大し、古墳時代初頭から前期中頃に遺構数はピークになった。弥生時代後期後半からは外来系土器の搬入が始まり、古墳時代初頭から前期前半には東は遺跡湾沿岸、西は朝鮮半島各地とその範囲が広くなる。また古墳時代初頭から前期中頃にかけては、精鍊・鍛錬・治済や輪羽口などの鉄器生産関連遺物が多く出土しており、原料の輸入から加工といった複合的な鉄器生産センターが営まれていた。同時期には日本列島各地に点的に同様の技術が見られるが、博多遺跡群のものは生産量、生産規模とともに他の地域のものとは明らかに違いがあり、当時としては最先端の技術があったものと考えられる。古墳時代中期から後期にかけては集落としては散在的であり、主に墳墓地が主体であった。その後、古代に入り、飛鳥・難波系の暗文土師器などが少量搬入されており、砂丘Iには官衙遺構が形成され、その周囲に遺構が展開されるようになる。

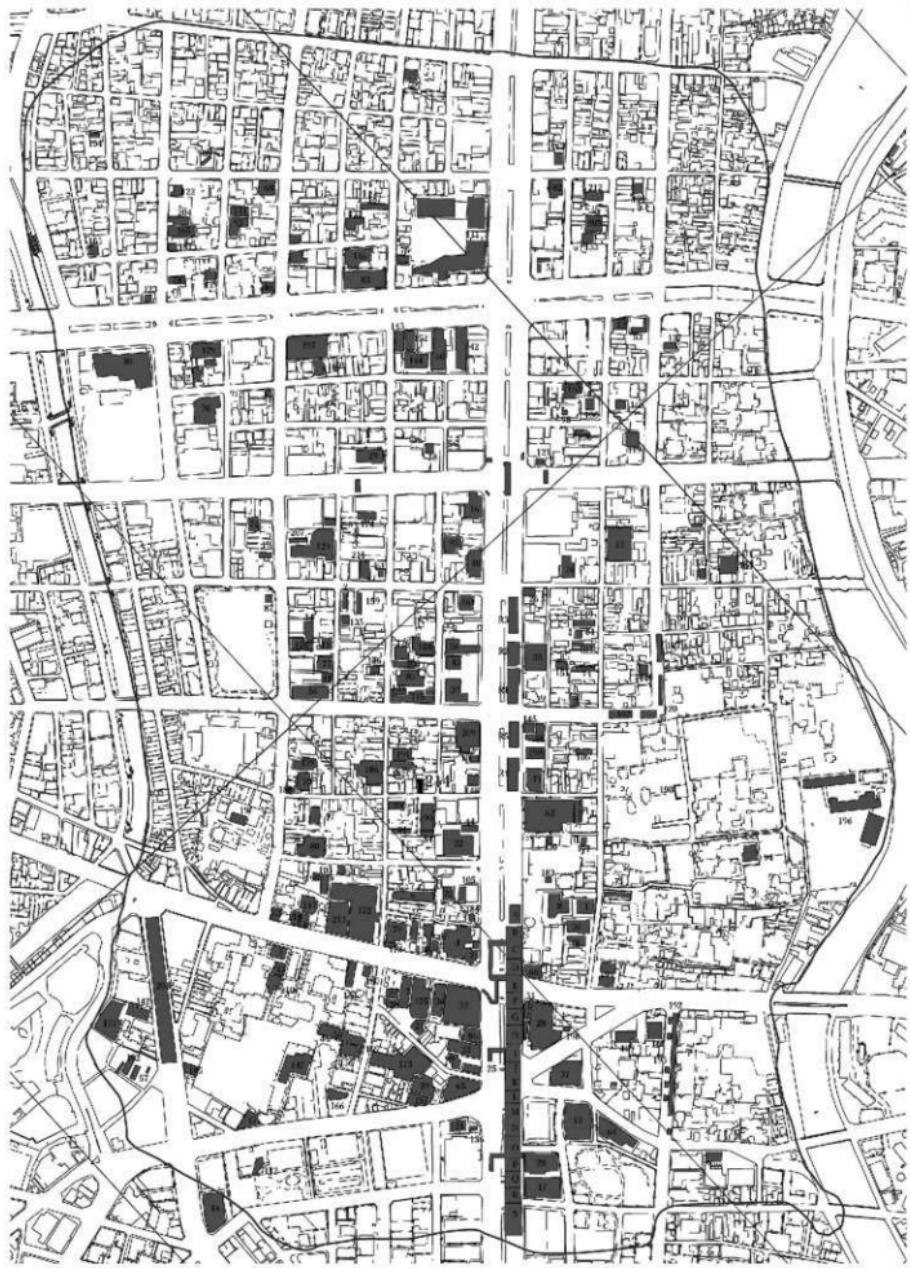
その後、11世紀後半には、鴻臚館に替わって日宋貿易の大拠点として繁栄を迎え、中世都市博多が誕生する。なお、それらを担った初期の宋商人の居住区や貿易港が砂丘IIの西部に存在したことが指摘されている。また、博多綱首の助成による聖福寺や承天寺等の禪刹の建立や、その後の鎮西探題の設置を契機とし、町割りが進められ、都市としての景観が整備される。一方、息浜は、砂丘間の埋め立て後、13世紀以降に都市化が急速に進行する。なお、文永の役（1274年）後に息浜の博多湾側には元寇防壁が築造されるため、その北側に町場が拡大するのは、15世紀後半以降となる。また、室町時代以降、日明貿易や日朝貿易の繁栄によって都市機能の中心は、博多浜から息浜へと移っていたことが、検出遺構や出土遺物の量から窺える。戦国時代においては、貿易都市博多の領地をめぐる諸大名の争いは激化し、度重なる戦火が博多を襲っていることは、該期の焼土層によっても証明される。その後、天正年に九州平定を遂げた豊臣秀吉による都市復興および新たな町割りが行われ、近世都市博多が幕を開ける。

今回報告する第214次調査区は、砂丘IIの尾根線に近い陸側の緩斜面に位置しており周辺の調査例は北西側に第162次調査、第186次調査、第191次調査が、南側には第90次調査、第200次調査が、北東側には第10次調査、第148次調査、第209次調査が行われている（第2図）。本調査区周辺での初現期の遺構は、第162次調査の弥生時代終末期前後の甕棺墓や第186次調査の同時期の土坑である。ただ混在する遺物から弥生時代中期末に遡る遺構が散在していた可能性が高く、この一帯は該期の集落の遺構分布の主体となる砂丘Iの周辺部にあたると考えられる。続く遺構は古代に認められ、第162・186次検出の北東一南西方向の区画溝や第90次調査出土の大宰府関係施設と同範の軒瓦が注目される。また、帶飾りや越州窯系青磁も散見され、この一帯は祇園町交差点周辺の官衙域に推定される区画の外部であるものの、該期の遺構の扱いりやあり方については今後の検討を要する。中世では博多浜一帯と同様に11世紀後半以降に遺構が増加するが、本調査区周辺では12世紀後半をピークとし、13世紀後半以降の遺構は減少する傾向にある。これは本調査区南東側に中心施設の所在が推定されている鎮西探題の設置と関係することが想定される。

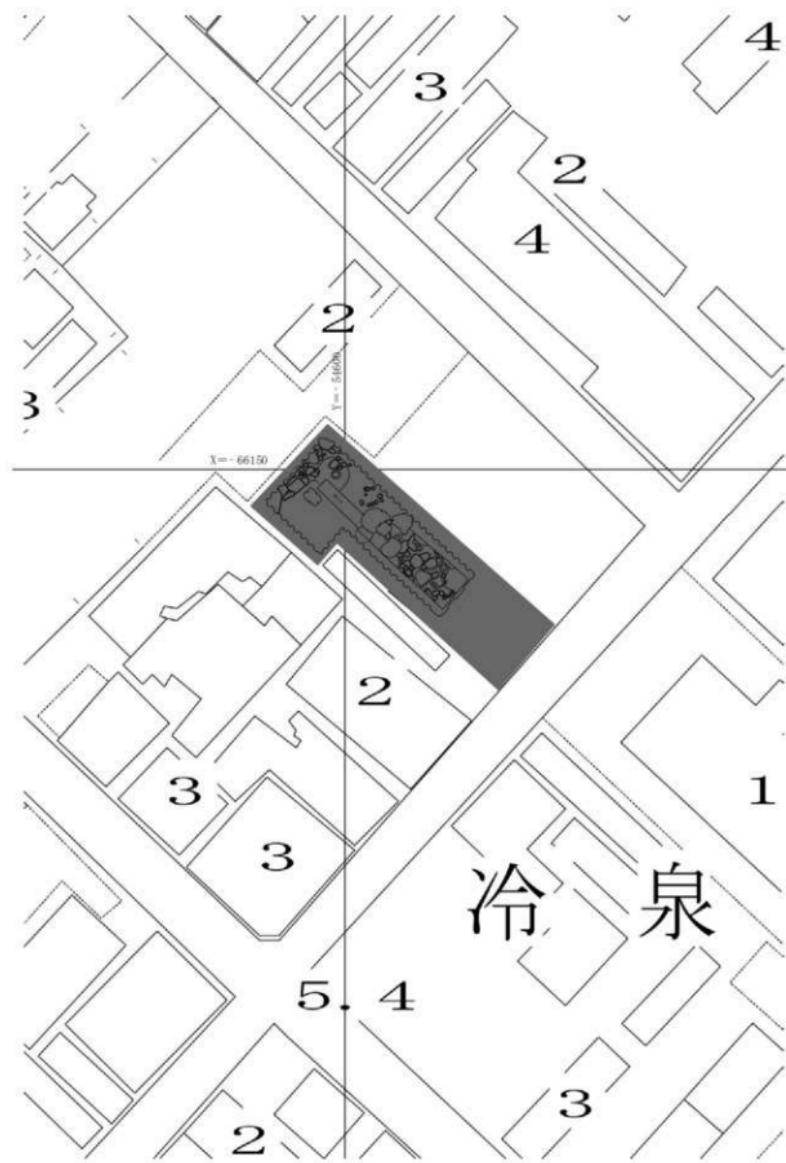


1 博多遺跡群 2 箱崎遺跡 3 吉塙本町遺跡 4 吉塙遺跡 5 吉塙祝町遺跡

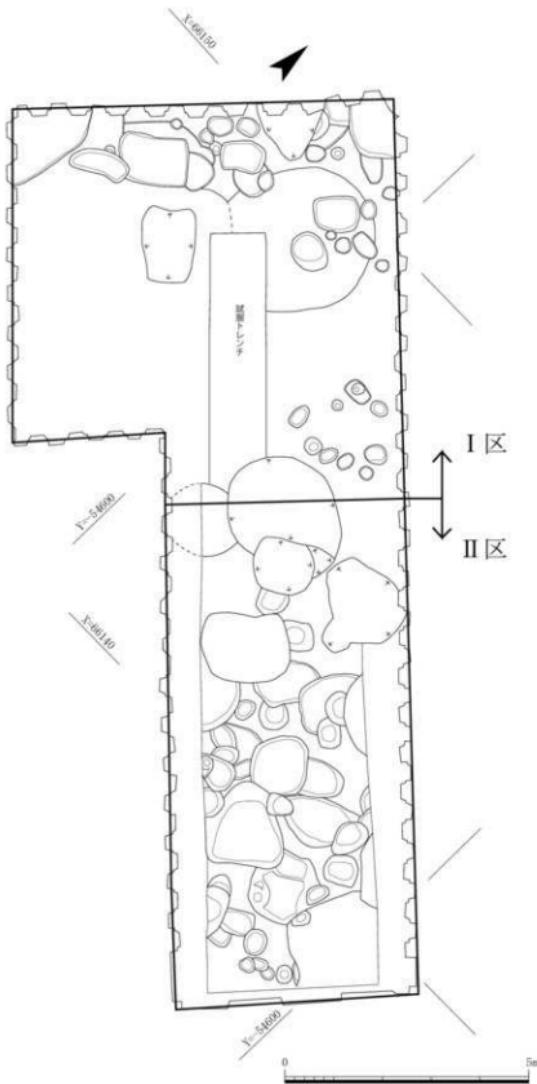
第1図 博多遺跡群周辺分布図 (1/25000)



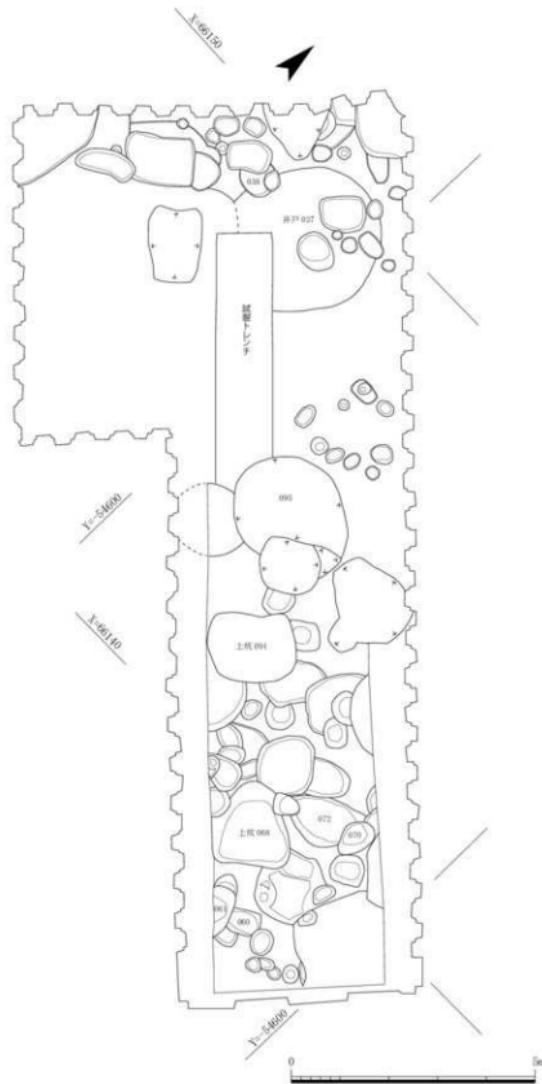
第2図 博多遺跡群調査地点位置図



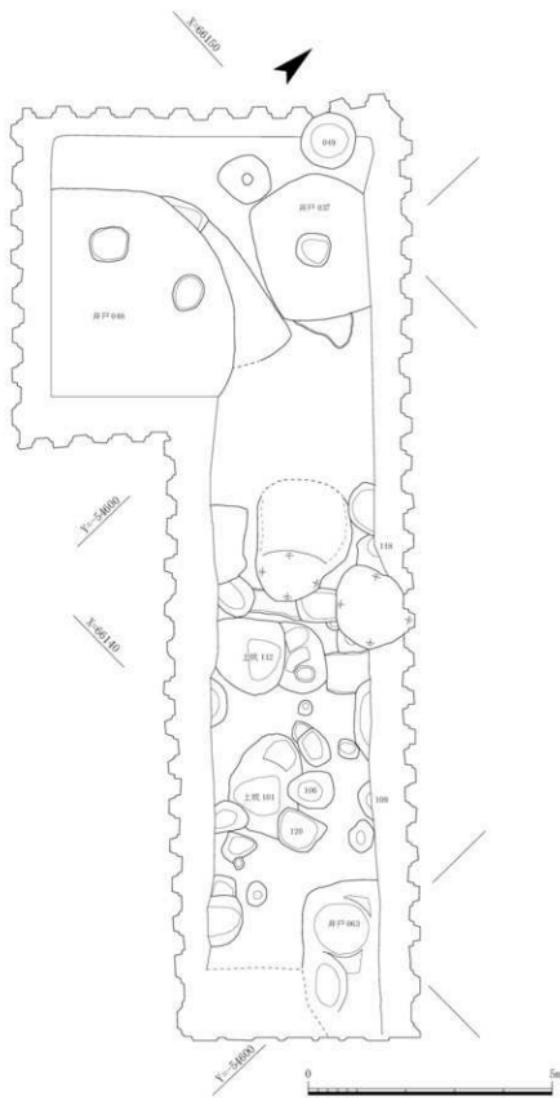
第3図 博多遺跡群第214次調査地点位置図 (1/500)



第4図 博多遺跡群第214次調査地点 調査区分け (1/100)



第5図 博多遺跡群第214次調査 1面全体図 (1/100)



第6図 博多遺跡群第214次調査 2面全体図 (1/100)

第2章 調査の記録

1 調査の概要

今回報告する博多遺跡群第214次調査は、福岡市博多区冷泉町446、448に所在する。調査地点は博多遺跡群のおよそ中央に位置する。

発掘調査は表土の鏝取りから始まり、まず地表面から約1.8mまでの土を撤出した。平成29年6月30日に発掘器材の搬入など条件整備を行い、翌日から作業員による発掘調査を開始した。今回の調査では廃土置き場を確保するために、調査区を2分割して行った。調査区北西側半分をI区、南東側をII区とした(第4図)。8月23日にI区の調査が終わり、8月25日からII区の調査を開始した。そして10月3日までに発掘器材等をすべて撤収しすべての調査を完了した。

遺構面は大きく2面あり、1面は茶褐色砂質土上面(標高約4m)に、2面は黄白色砂層上面に設定した。第1面の検出遺構は井戸1基、土師器の廃棄土坑、数多くの柱穴、ビットである。第2面の検出遺構は井戸2基、土坑3基、ビットである。

2 遺構と遺物

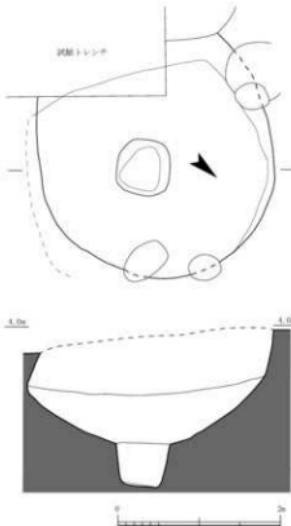
以下、遺構種別ごとに調査遺構及び出土遺物について報告する。

1) 井戸

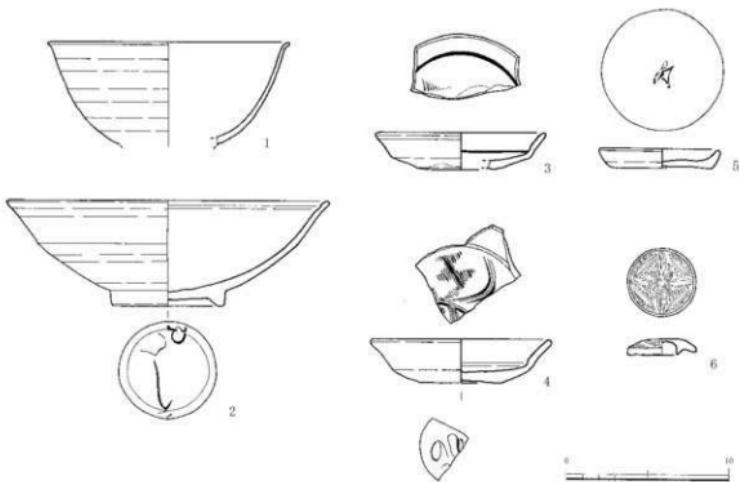
井戸037(第7図)

I区1面で検出された井戸である。規模は径2.7m、深さ1.9mである。井筒の規模は径68cmである。

出土遺物(第8図)1・2は白磁の椀である。1は口径13.6cmを測る。胎土は灰白色を、釉薬は灰白色を呈している。器壁は薄く口縁端部が外反している。2は口径20cm、器高6.5cm、高台径6.8cmを測る。胎土は灰黄色を、釉薬は浅黄色を呈している。高台は低く、口縁部は外反している。高台底には線状の墨書が描かれている。VIII-1類。3・4は同安窯の青磁平底皿である。3は口径10.6cm、器高2cm、底径4cmを測る。胎土は灰白色を、釉薬は灰オリーブを呈している。体部屈曲部に沈線があり、見込には柳描き状の文様がある。4は口径11.2cm、器高2.6cm、底径5cmを測る。胎土は灰黄色を、釉薬は灰オリーブを呈している。見込には柳描文様があり、外面底部には花押と思われる墨書がある。5は土師器皿である。口径7.8cm、器高2cm、底径6.2cmを測る。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。内面に「内」と思われる墨書がある。6は青白磁の合子蓋である。口径4.2cm、器高1cm、底径1.9cm。胎土は白色を、釉薬は明緑灰色を呈している。



第7図 井戸037実測図(1/60)



第8図 井戸037出土土器 (1/3)

井戸048(第9図)

I区2面で検出された井戸である。一部調査区外にかかっており、全容はわからないが、およそ径3.5m以上、深さ2.1mである。井筒が二つあり、作り直しが行われたと考えられる。井筒1が径1m、井筒2が径70cmである。

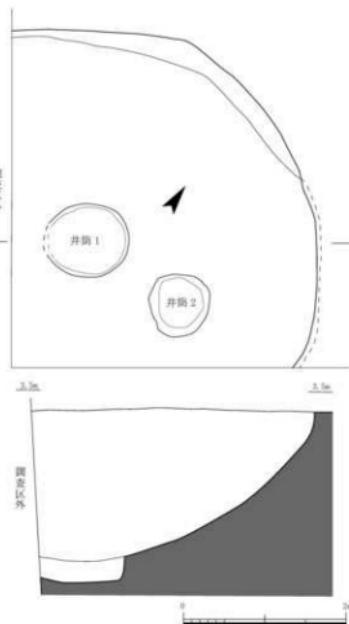
出土遺物(第10図) 7は土師器皿である。口径10.2cm、器高1.3cm、底径8.5cmを測る。胎土は精緻で、色調は灰黄褐色～黄橙色を呈している。8は青磁碗の底部である。底径は4.6cmを測る。胎土は灰白色を、釉薬は灰オリーブを呈している。高台底に墨書きがある。9・10・11は白磁碗である。9は口径12.2cm、器高3.8cm、底径5.1cmを測る。胎土と釉薬は灰白色を呈している。高台底に花押と思われる墨書きがある。VI-1a類。10は底部のみである。底径は5.4cmを測る。胎土は淡黄色を、釉薬は浅黄色を呈している。高台底に墨書きがある。11は底部のみである。底径は5.7cmを測る。胎土は灰白色を、釉薬は黄～オリーブ色を呈している。外面底部には墨書きがある。12・13は瓦玉である。12は土師器を打ち欠いたもので、底径は7.8cmを測る。高台底に花押と思われる墨書きと線刻がある。13は白磁碗を打ち欠いたもので、底径は7.6cmを測る。胎土と釉薬は灰黄色を呈している。高台は削りだし高台である。

井戸063(第11図)

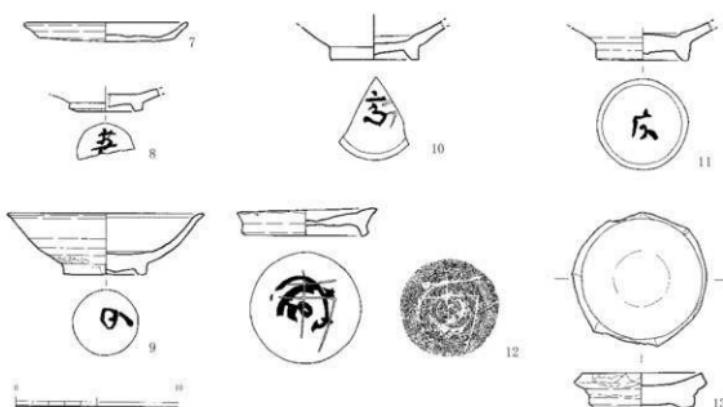
II区2面で検出された井戸である。一部が調査区外に延びており、全容はつかめない。残存している規模で幅1.6m、深さ1.3mである。井筒は径1mである。

出土遺物 14～22は井筒から出土した遺物(第12図)で、23～43は掘方から出土した遺物である(第13図)。14・15は土師器皿である。14は口径9.8cm、器高1.6cm、底径7.0cmを測る。胎土は精緻で、色調は灰白色～浅黄色を呈している。調整は体部が回転ナデで、外面底部には板状圧

痕がある。15は口径10cm、器高1.1cm、底径8.0cmを測る。胎土は精緻で、色調は灰白色を呈している。調整は回転ナデで、底部には板状圧痕がある。16・17は土師器楕である。16は口径14.8cm、器高3.7cm、底径6.0cmを測る。胎土は精緻で、色調は浅黄色を呈している。調整は体部が回転ナデで外面底部に板状圧痕がある。17は口径15cm、器高3.8cmを測る。胎土は精緻で、色調は浅黄色を呈している。少し歪んでいる。調整は回転ナデである。18は須恵器の壺である。口径は12cmを測る。胎土は精緻で、色調は灰褐色～黒色を呈している。調整は回転ナデである。19・20は白磁楕である。19は口径15.4cmを測る。口縁部が少し外反する。胎土と釉薬は灰白色を呈している。20は破片で法量は不明である。体部内面に細い弦線がある。体部外面には浅い線彫の線が放射状に刻まれている。胎土と釉薬は灰白色を呈している。21は蓮華形の綠釉香炉壺である。口径約8.4cm、器高3.7cm、底径6.8cmを測る。胎土は浅黄橙で、釉薬は鮮やかな黄緑～緑色を呈している。外面には蓮弁文様がある。底面には径1cm程の穿孔が3か所残存しており、復元すると6か所あるものと思われる。22は白磁楕を利用した瓦玉である。



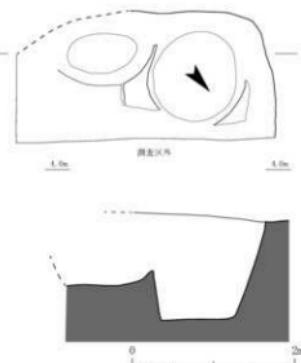
第9図 井戸048実測図 (1/60)



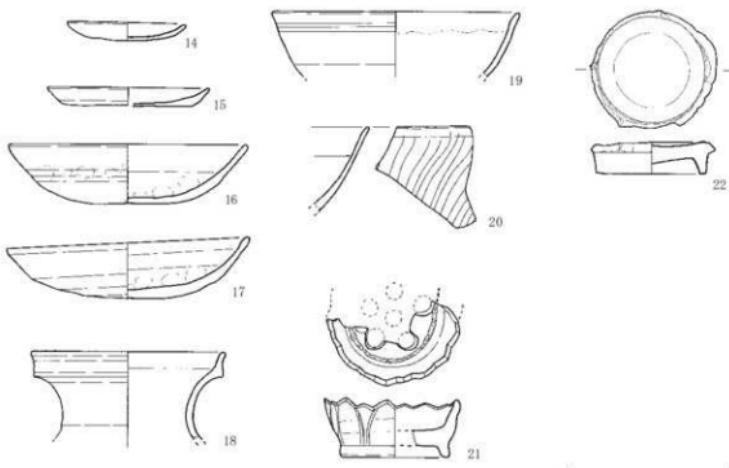
第10図 井戸048出土土器 (1/3)

底径は6.8cmを測る。胎土は灰白色を、釉薬は灰白～淡黄色を呈している。以上が井筒出土遺物である。

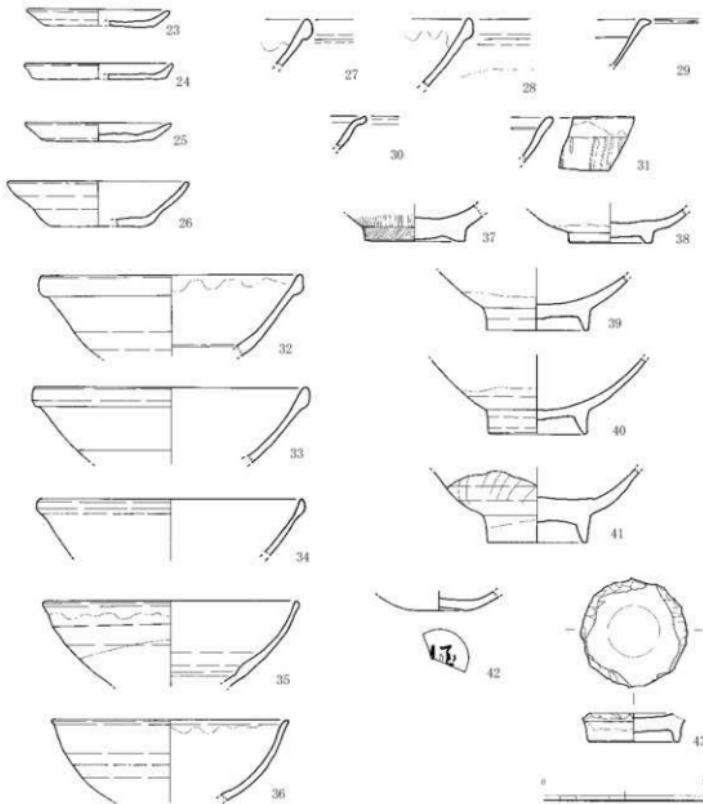
23～25は土師器の皿である。23は口径8.4cm、器高1cm、底径6.8cmを測る。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。調整は基本回転ナデで、内面底部はその後に一定方向のナデを行い、底部には板状圧痕がある。24は口径9.2cm、器高1cm、底径は8.3cmを測る。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。調整は回転ナデで、内面底部はその後に一定方向のナデを行っている。底部は回転糸切り痕がある。25は口径9cm、器高1.15cm、底径6.8cmを測る。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙～灰白色を呈している。調整は基本回転ナデで、内面底部はその後に一定方向のナデを行っている。底部には板状圧痕がある。26は土師器壺である。口径11.2cm、器高2.8cm、底径5.8cmを呈している。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙を呈している。調整は回転ナデを基本とし、内面底部はその後に一定方向のナデを行っている。底部は回転糸切りの後、板状圧痕を行っている。27～29は白磁碗の口縁の破片である。破片であるため法量は不明である。27は口縁部が玉縁である。胎土と釉薬は灰白色を呈している。28は口縁部が玉縁である。胎土と釉薬は灰白色を呈している。29は口縁部が直口縁となる。胎土と釉薬は灰白色を呈している。30は青磁小鉢の口縁部破片である。胎土は灰白色で、釉薬は灰オリーブを呈している。31は同安窯系青磁碗の口縁部破片である。胎土は灰白色を、釉薬は灰オリーブを呈している。



第11図 井戸063実測図 (1/60)



第12図 井戸063 井筒出土土器 (1/3)



第13図 井戸063掘方出土土器 (1/3)

外面内面に1条の沈線があり、体部外面には片切形で縦線が刻まれている。32～41は白磁碗である。32は口径16cmを測る。胎土は灰白色を、釉薬は灰オリーブを呈している。口縁部は玉縁である。33は口径17cmを測る。胎土は灰白色を、釉薬は灰オリーブを測る。口縁部は玉縁である。34は口径16cmを測る。胎土と釉薬は灰白色を呈している。口縁部は玉縁である。35は口径15.8cmを測る。胎土は灰白色を、釉薬は明黄褐色を呈している。口縁部は直口になる。36は口径14.6cmを測る。胎土と釉薬は灰白色を呈している。口縁部はやや外反にする。37～41は底部のみである。37は高台が削りだし高台である。径は6.2cmを測る。胎土と釉薬は灰白色～浅黄橙色を呈している。外面には飛びかんな痕がある。38は高台径が5.1cmを測る。胎土と釉薬は灰白色を呈している。39は高台径6.3cmを測る。胎土は浅黄色で、釉薬は灰白～灰黄色を呈している。外面底部にはケズリの痕跡がある。40は高台径6.2cmを測る。胎土と釉薬は灰白色を呈している。外面底部にはケズリの痕跡がある。

41は高台径6.2cmを測る。胎土と釉薬は灰白色を呈している。外面には線彫りで縦線が施されている。底部にはケズリの痕跡がある。42は白磁の平底皿である。底径は5.4cmを測る。胎土と釉薬は灰白色を呈している。外面底面に墨書きがある。43は白磁碗を利用した瓦玉である。底径が5.6cmを測る。胎土は灰白色で、釉薬は灰白色～灰オリーブを呈している。以上が掘方出土の遺物である。

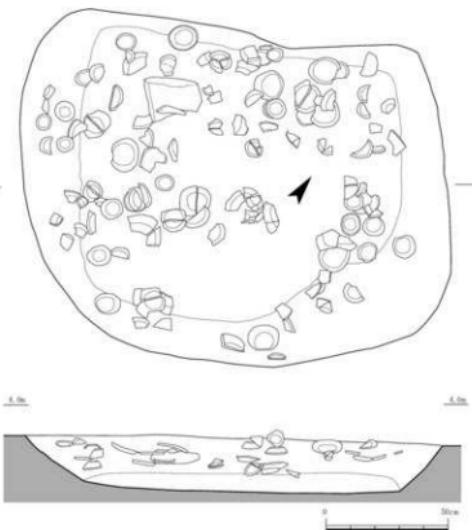
2) 土坑

土坑091（第14図）

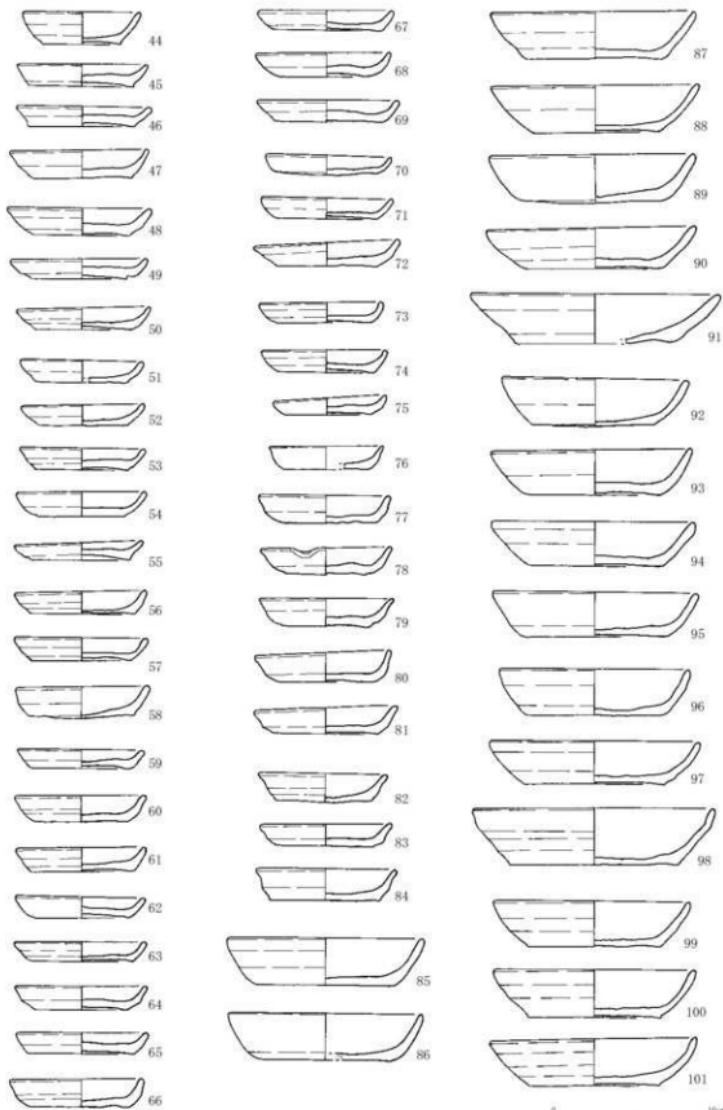
II区1面で検出された土師器の廃棄土坑である。長軸172cm、短軸137cm、深さ21cmを測る。

出土遺物（第15・16図）44～84は土師器皿である。44は口径7.3cm、器高2cm、底径4.8cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調は橙色を呈している。45は口径8.2cm、器高1.4cm、底径6.6cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調はにぶい橙色を呈している。46は口径8.4cm、器高1.3cm、底径6.6cmを測る。調整は体部が回転ナデで、外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。47は口径8.6cm、器高1.8cm、底径6.1cmを測る。調整は体部が回転ナデで内面底部が一定方向のナデ、外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。48は口径8.9cm、器高1.7cm、底径6cmを測る。調整は体部が回転ナデで内面底部が一定方向のナデ、外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。49は口径8.5cm、器高1.3cm、底径6.2cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。50は口径8.3cm、器高1.4cm、底径6.1cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。内外面にやや黒い箇所がススか。

51は口径7.6cm、器高1.4cm、底径5.7cmを測る。調整は体部が回転ナデで内面底部に一定方向のナデ、外面底部は糸切りののち、板状圧痕を行っている。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。52は口径7.7cm、器高1.4cm、底径5.5cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りののち、板状圧痕を行っている。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。53は口径7.8cm、器高1.4cm、底径5.8cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りののち、板状圧痕を行っている。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。54は口径8.1cm、器高1.5cm、底径



第14図 土坑091実測図（1/20）



第15図 土坑091出土土器 [1] (1/3)

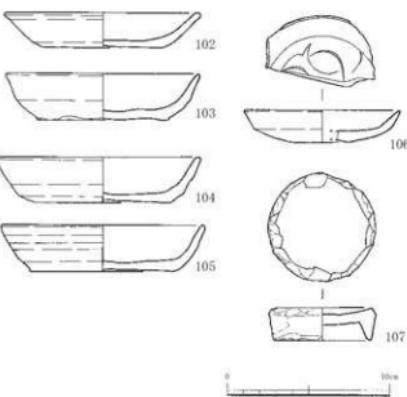
5.4cmを測る。調整は体部が回転ナデ、内面底部に一定方向のナデ、で外面底部が糸切りののち、板状圧痕を行っている。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。55は口径8.1cm、器高1.3cm、底径6cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りののち、板状圧痕を行っている。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。56は口径8.2cm、器高1.5cm、底径6.6cmを測る。調整は体部が回転ナデで、内面底部に一定方向のナデ、外面底部が糸切りののち、板状圧痕を行っている。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。57は口径8.3cm、器高1.5cm、底径6.1cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りののち、板状圧痕を行っている。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。58は口径8.4cm、器高2cm、底径6.5cmを測る。調整は体部が回転ナデで、内面底部に一定方向のナデ、外面底部が糸切りののち、板状圧痕を行っている。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。

59は口径8cm、器高1.25cm、底径6.1cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。60は口径8.1cm、器高1.6cm、底径5.8cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。61は口径8.1cm、器高1.5cm、底径6.4cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。62は口径8.2cm、器高1.7cm、底径5.6cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。63は口径8.2cm、器高1.2cm、底径6.4cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。64は口径8.2cm、器高1.7cm、底径5.6cmを測る。調整は体部が回転ナデで、内面底部に一定方向のナデ、外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。

65は口径8.3cm、器高1.4cm、底径6.6cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りののち、板状圧痕を行っている。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。

66は口径8.4cm、器高1.8cm、底径6.1cmを測る。調整は体部が回転ナデで、内面底部に一定方向のナデ、外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。67は口径8.4cm、器高1.3cm、底径6.7cmを測る。調整は体部が回転ナデで、内面底部に一定方向のナデ、外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。68は口径8.4cm、器高1.5cm、底径5.6cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。69は口径8.8cm、器高1.5cm、底径6.6cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。

70は口径7.9cm、器高1.3cm、底径6.4cmを測る。調整は体部が回転ナデで、内面底部に一定方向のナデ、外面底部が糸切りののち、板状圧痕を行っている。胎土は精緻で、色調はにぶい灰黄色を呈



第16図 土坑091出土土器〔2〕(1/3)

している。71は口径8.2cm、器高1.3cm、底径6.2cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りののち、板状圧痕を行っている。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。72は口径9.1cm、器高1.7cm、底径6.2cmを測る。調整は体部が回転ナデで、内面底部に一定方向のナデ、外面底部が糸切りののち、板状圧痕を行っている。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。

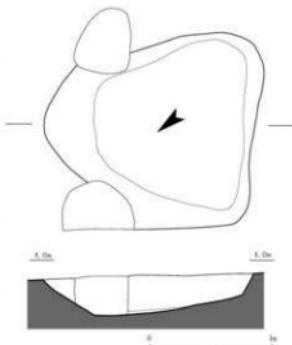
73は口径7.7cm、器高1.3cm、底径5.8cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調はにぶい橙色を呈している。74は口径8cm、器高1.5cm、底径6cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。75は口径7.1cm、器高1.3cm、底径5.3cmを測る。調整は体部が回転ナデで、内面底部に一定方向のナデが若干あるか。外面底部が糸切りである。

76は口径7cm、器高1.9cm、底径5.8cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。77は口径8.2cm、器高1.7cm、底径6.4cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。78は口径8.3cm、器高1.8cm、底径5cmを測る。調整は体部が回転ナデで、内面底部に一定方向のナデ、外面底部が糸切りである。口縁部に一部四凹んだ部分がある。胎土は精緻で、色調はにぶい橙色を呈している。79は口径8.3cm、器高1.6cm、底径5.4cmを測る。調整は体部が回転ナデで、内面底部に一定方向のナデ、外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調はにぶい橙色を呈している。80は口径8.5cm、器高2cm、底径5.8cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調はにぶい橙色を呈している。81は口径8.9cm、器高1.8cm、底径6.4cmを測る。調整は体部が回転ナデで、内面底部に一定方向のナデ、外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。

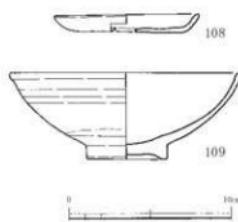
82は口径8.1cm、器高1.8cm、底径6cmを測る。調整は体部が回転ナデで、内面底部に一定方向のナデ、外面底部が糸切りののち、板状圧痕を行っている。胎土は精緻で、色調はにぶい浅黄色を呈している。

83は口径8.3cm、器高1.5cm、底径5.6cmを測る。調整は体部が回転ナデで、内面底部に一定方向のナデ、外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。84は口径8.7cm、器高1.2cm、底径6.8cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りである。

これらの土器皿はいくつかに分類できる。44～50までは底部調整が糸切りで体部がやや内湾しており、また体部と底部の境に明確な凌を持つもの。51～58は底部調整が糸切りと板状圧痕で、体部が内湾、体部と底部の境に明確な凌を持つもの。59～64は糸切りで体部が直線的に伸び、境に凌を持つもの。65は糸切りと板状圧痕で体部が直線的に伸び、境に凌を持つもの。66～69



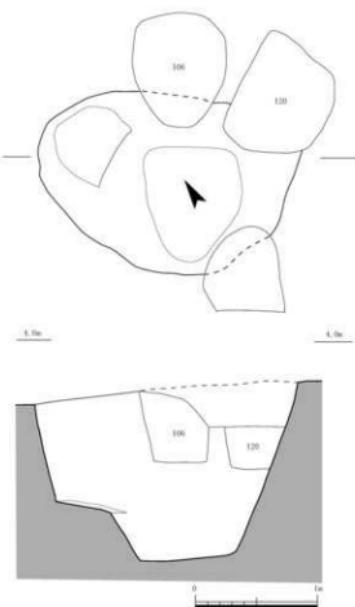
第17図 土坑068実測図 (1/40)



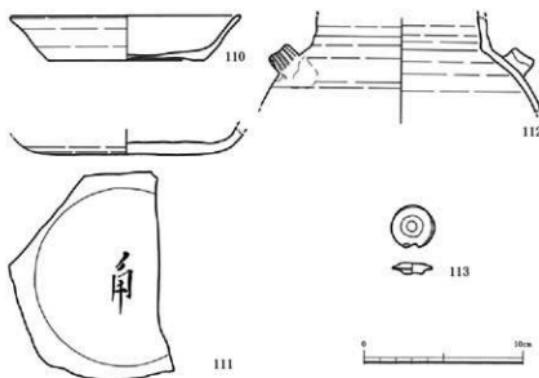
第18図 土坑068出土土器 (1/3)

は糸切りで体部がやや内湾しており、体部と底部の境が丸く収まるもの。70～72は糸切りと板状圧痕で体部と底部の境が丸く収まるもの。73～75は口縁端部が内湾するもの。76～84までには口縁端部がやや外反するもの。

85～105は土器器の杯。85は口径12.2cm、器高2.9cm、底径8.6cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調は浅黄色～灰色を呈している。86は口径12cm、器高2.9cm、底径8.6cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調は灰黄色を呈している。87は口径12.8cm、器高3cm、底径8.5cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調ははにぶい黄橙色を呈している。88は口径12.8cm、器高2.9cm、底径7.6cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調は灰黄色を呈している。89は口径12.8cm、器高3cm、底径8.6cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調は灰黄褐色を呈している。90は口径12.6cm、器高2.9cm、底径8.8cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りである。胎土は精緻である。91は口径15.5cm、器



第19図 土坑101実測図 (1/40)



第20図 土坑101出土土器 (1/3)

高3.2cm、底径10cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りである。内面が黒くススか。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。

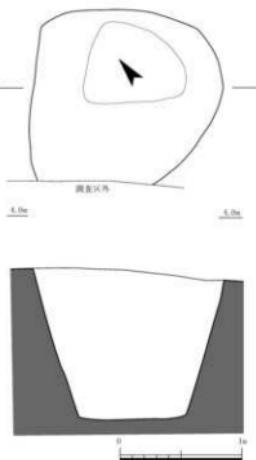
92は口径11.6cm、器高3.1cm、底径7.6cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りののち、板状圧痕を行っている。胎土は精緻で、色調はにぶい灰黄色を呈している。93は口径12.5cm、器高2.9cm、底径8.2cmを測る。調整は体部が回転ナデで、内面底部に一定方向のナデ、外面底部が糸切りののち、板状圧痕を行っている。胎土は精緻で、色調はにぶい橙色を呈している。94は口径12.7cm、器高2.8cm、底径8.3cmを測る。調整は体部が回転ナデで、内面底部に一定方向のナデ、外面底部が糸切りののち、板状圧痕を行っている。胎土は精緻で、色調は浅黄色色を呈している。95は口径12.8cm、器高2.8cm、底径8.6cmを測る。調整は体部が回転ナデで、内面底部に一定方向のナデ、外面底部が糸切りののち、板状圧痕を行っている。胎土は精緻で、色調はにぶい橙色を呈している。

96は口径11.8cm、器高2.9cm、底径8.6cmを測る。調整は体部が回転ナデで、内面底部に一定方向のナデ、外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調は浅黄橙色を呈している。97は口径13cm、器高2.7cm、底径8.5cmを測る。調整は体部が回転ナデで、内面底部に一定方向のナデ、外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。98は口径15cm、器高3.5cm、底径10.4cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調はにぶい橙色を呈している。

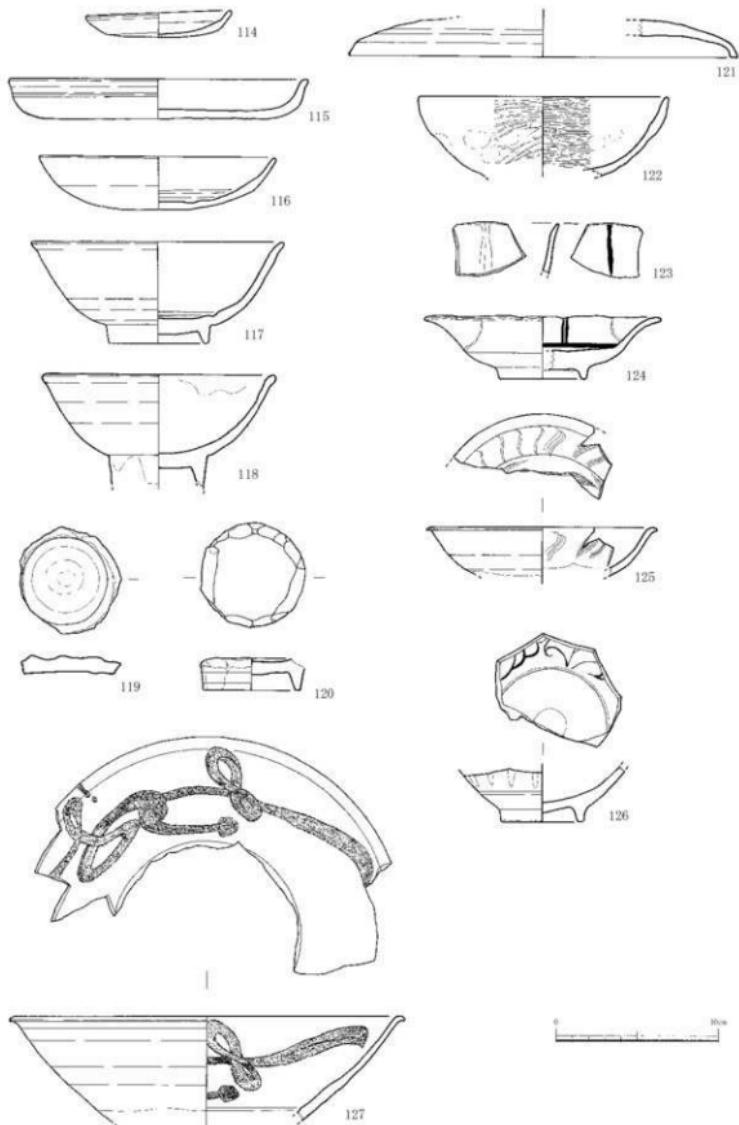
99は口径12.2cm、器高2.9cm、底径8.2cmを測る。調整は体部が回転ナデで、内面底部に一定方向のナデ、外面底部が糸切りののち、板状圧痕を行っている。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。100は口径12.6cm、器高3cm、底径8.2cmを測る。調整は体部が回転ナデで、内面底部に一定方向のナデ、外面底部が糸切りののち、板状圧痕を行っている。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。101は口径12.8cm、器高2.9cm、底径8cmを測る。調整は体部が回転ナデで、内面底部に一定方向のナデ、外面底部が糸切りののち、板状圧痕を行っている。胎土は精緻で、色調は浅黄橙色を呈している。

102は口径12.2cm、器高2.1cm、底径7.4cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調は灰黄色を呈している。103は口径12cm、器高2.9cm、底径8.1cmを測る。調整は体部が回転ナデで、内面底部に一定方向のナデ、外面底部が糸切りののち、板状圧痕を行っている。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。104は口径12.6cm、器高2.8cm、底径8.7cmを測る。調整は体部が回転ナデで、内面底部に一定方向のナデ、外面底部が糸切りののち、板状圧痕を行っている。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。105は口径12.6cm、器高2.9cm、底径8.8cmを測る。調整は体部が回転ナデで外面底部が糸切りである。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。

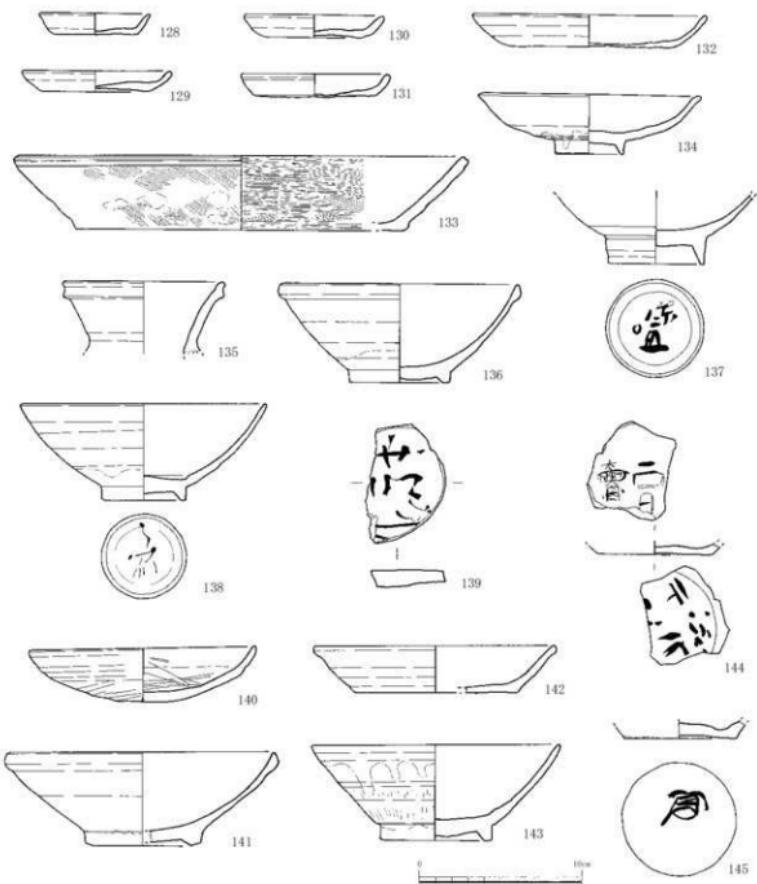
106は白磁の平底皿。口径9.6cm、器高2cm、底径3.4cm。胎土は灰白色。釉薬は浅黄色。見込に文様があるが、釉薬が厚くかかるており詳細は不明。107は白磁碗を利用した瓦玉。径6cm。胎土と釉薬は灰色。



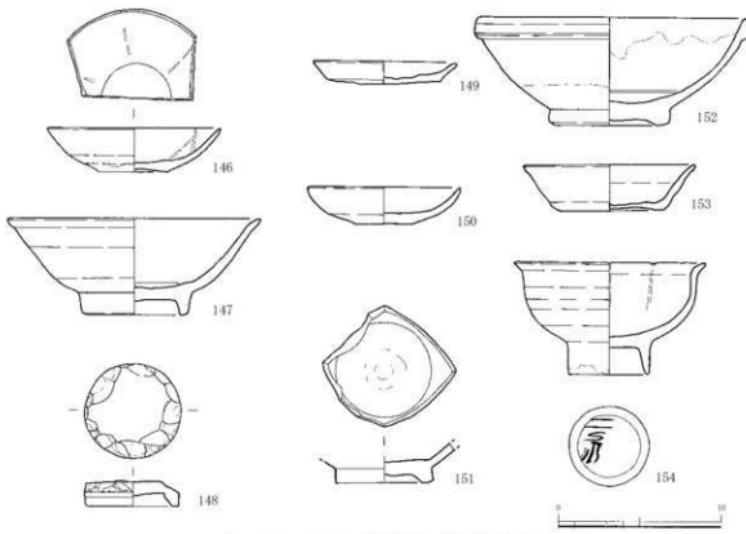
第21図 土坑112実測図 (1/40)



第22図 土坑112出土土器 (1/3)



第23図 I区その他遺構出土土器 (1/3)



第24図 II区その他遺構出土土器 (1/3)

土坑068(第17図)

II区1面で検出された土坑である。長軸170cm、短軸160cm、深さ33cmを測る。

出土遺物(第18図) 108は土師器皿である。口径9cm、器高1.2cm、底径7cmを測る。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。調整は回転ナデで外面底部には板状圧痕がある。また底部に径1~1.2cmの穿孔があり、内面がいぶされたように黒く灯明皿として使用されたか。109は白磁椀である。口径14.2cm、器高5.3cm、底径5cmを測る。胎土は灰白色を、釉薬は浅黄色を呈している。

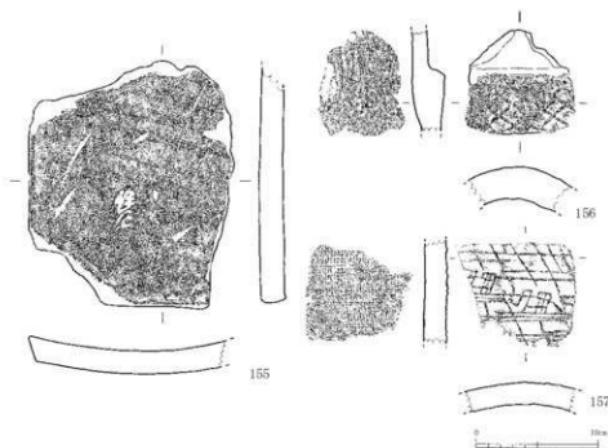
土坑101(第19図)

II区2面で検出された土坑ある。長軸215cm、短軸150cm、深さ146cmを測る。106と120に切られる。

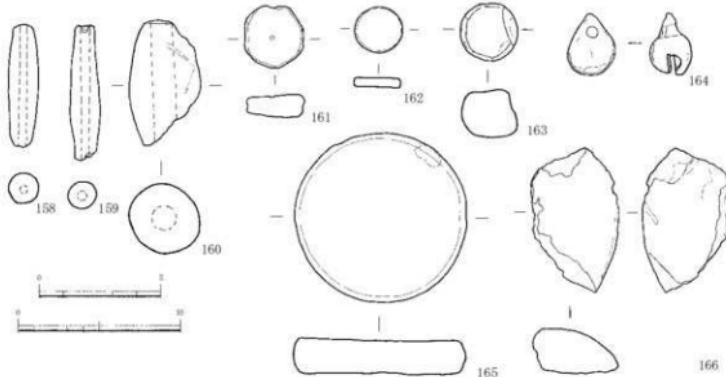
出土遺物(第20図) 110は土師器皿である。口径14.5cm、器高2.8cm、底径9.8cmを測る。胎土は精緻で、色調は橙色を呈している。調整は回転ナデで、外面底部はナデのち板状圧痕である。111は須恵器皿である。底径は11.4cmを測る。胎土は微粒の白色粒と雲母を少量含む。色調は灰白色を呈している。底部に「角」と墨書がある。112は白磁の耳付き壺である。胎土と釉薬は灰白色を呈している。最低2か所に耳がついている。113は陶器の蓋である。胎土は灰白色を、釉薬は灰オリーブ色を呈している。釉薬は上部のみかかる。

土坑112(第21図)

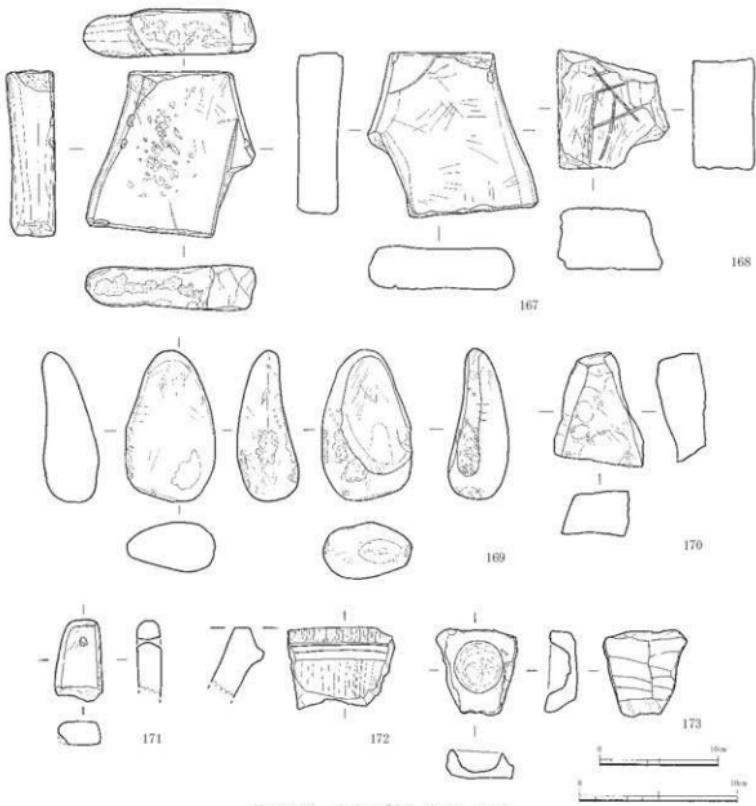
II区2面で検出された土坑である。長軸155cm、短軸143cm、深さ124cmを測る。



第25図 出土瓦製品 (1/4)



第26図 出土土製品 (1/2 + 1/3)



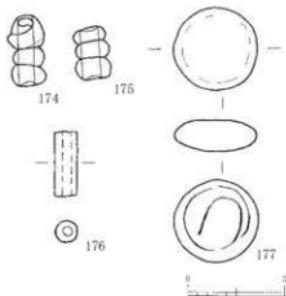
第27図 出土石製品 (1/3・1/4)

出土遺物（第22図）114・115は土師器皿である。114は口径9.1cm、器高1.7cm、底径1.2cmを測る。胎土は精緻で、色調は浅黄橙色を呈している。調整は回転ナデで内面底部が後に一定方向のナデを行っている。外面底部は糸切り後板状圧痕を行っている。115は口径18.4cm、器高2.5cm、底径13.4cmを測る。胎土は精緻で、色調は橙色を呈している。調整は体部のみ回転ナデで他はナデである。116は土師器杯である。口径14.6cm、器高3.4cm、底径7cmを測る。胎土は精緻で、色調は浅黄橙色を呈している。調整は回転ナデで外面底部は板状圧痕を行っている。117・118は白磁碗である。117は口径15.5cm。器高6.3cm、底径6.1cmを測る。胎土と釉薬は灰白色を呈している。外面底部はケズリである。118は口径が14.5cm前後である。歪んでおり正確な法量は不明。胎土と釉薬は灰色を呈している。119・120は瓦玉である。119は径6cmを測る。胎土と釉薬は灰白色を呈している。120は胎土が粗く、色調は赤褐色を呈している。121は須恵器の蓋である。口径は24cmを測る。色調は灰～灰白色を呈している。調整は天井部がヘラ削りで、他はナデである。122は瓦器椀である。

口径は 15.4cm を測る。胎土は精緻で、色調は黒～灰色を呈している。調整は内面が細かいヨコヘラミガキで、外面は細かいヨコ・ナナメヘラミガキである。123 は越州窯系青磁輪花小鉢の口縁破片である。破片のため法量は不明。胎土は灰色を、釉薬は灰オリーブを呈している。124 は青磁輪花皿である。口径 14.7cm、器高 3.9cm、底径 5.4cm を測る。胎土は灰色を、釉薬はオリーブ黄色を呈している。6か所に刻みを入れて輪花になっている。125 は白磁皿である。口径は 14.2cm を測る。胎土と釉薬は灰白色を呈している。見込と体部に櫛描文が施されている。126 は青磁椀である。高台は径 5cm を測る。胎土は灰色を、釉薬は明緑色を呈している。体部外面上半部に縱方向の文様があり、内面には線彫り文様がある。127 は白磁椀である。口径は 24.6cm を測る。胎土と釉薬は灰白色を呈している。内面に草花文の鉄絵が施されている。

3) その他の遺構出土遺物（第 23・24 図）

128～134 は II 区 2 面 120 から出土した遺物である。128～131 は土師器皿である。128 は口径 6.9cm、器高 1.3cm、底径 5.2cm を測る。胎土は精緻で、色調は浅黄橙色を呈している。129 は口径 9.2cm、器高 1.3cm、底径 6.8cm を測る。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。130 は口径 8.7cm、器高 1.4cm、底径 6cm を測る。胎土は精緻で、色調は灰黄褐色～橙色を呈している。131 は口径 9.2cm、器高 1.5cm、底径 7.4cm を測る。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。それぞれ調整は回転ナデで外面底部は糸切りである。132 は土師器皿である。口径 14.4cm、器高 2cm、底径 9.8cm を測る。胎土は精緻で、色調は浅黄橙～にぶい黄橙色を呈している。調整は回転ナデで外面底部は糸切りである。133 は土師器鍋である。口径 28cm、器高 4.6cm、底径 20.2cm を測る。内面調整はヨコハケ、外面調整はヨコ・ナナメハケである。134 は青磁椀である。口径 13.8cm、器高 3.7cm、底径 4.2cm を測る。胎土は白色、釉薬は明緑色を呈している。135 は I 区 1 面 038 出土である。須恵器壺である。口径は 10cm を測る。胎土は緻密であり、色調は灰色を呈している。調整は回転ナデである。136 は II 区 1 面 060 出土である。白磁の椀で、口径 14.2cm、器高 6.1cm、底径 6.2cm を測る。胎土は灰白色で、釉薬はやや黄色をおびた白色を呈している。137 は II 区 1 面 095 出土である。白磁椀で、底径 5.9cm を測る。胎土と色調は灰白色を呈している。高台底に墨書がある。138 は 038 出土の白磁椀である。口径 15.2cm、器高 6cm、底径 5.2cm を測る。胎土は灰白色、釉薬は淡黄色を呈している。高台底には墨書を思われるものが見られる。139 は II 区 1 面の 071 出土の瓦玉の土製内盤出ある。最大残存長 7.3cm、幅 5cm、厚さ 1cm を測る。胎土は橙色で、釉薬は灰白色を呈している。陶器の壺の底部を打ち書いているか。内面に墨書が見られる。140・141 は II 区 1 面 061 出土である。140 は土師器椀である。口径 14cm、器高 3.5cm、底径 3cm を測る。胎土は精緻で、色調は浅黄橙色を呈している。調整は回転ナデとナデで、底部は何かの工具で調整していると思われる。141 白磁椀である。口径 16.4cm、器高 5.8cm、底径 7.1cm を測る。胎土は白色で、色調は灰白色を呈している。142・143 は II 区 1 面 072 出土である。142 は土師器坏で、口径 14.6cm、器高 2.9cm、底径 10cm を測る。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。調整は回転ナデで、底部は回転糸切りである。143 は白磁椀で、口径 15.4cm、器高 6cm、底径 6.9cm を測る。胎土は灰白色で、釉薬は灰白～



第 28 図 出土玉製品 (1/1)

明オリーブ色を呈している。見込みで蛇の目に釉ハギがある。144・145は1面の遺構検出の際に出土した遺物である。144は瓦玉か。陶器の壺の底部を打ち欠いていると思われる。底径は7cmを測る。胎土にはぶい黄橙色で、釉薬は浅黄橙色を呈している。外面底部には花押と思われる墨書きがある。145は土師器皿で、底径は7cmを測る。胎土は精緻で、色調は浅黄橙色～橙色を呈している。内面外面両方に墨書きがある。

146・147・148はII区2面106から出土である。146は白磁輪花平底皿で、口径10.6cm、器高2.7cm、底径4.2cmを測る。胎土と釉薬は灰白色を呈している。内面体部に白い線が見られる。147は白磁椀で、口径15.6cm、器高6cm、底径6.5cmを測る。胎土と釉薬は灰色を呈している。148は瓦玉で、径5.7cmを測る。胎土と釉薬は灰白色を呈している。白磁椀を打ち欠いて加工している。149・150・151はII区2面108から出土である。149は土師器皿で、口径8.9cm、器高1.45cm、底径7cmを測る。胎土は精緻で、色調は浅黄橙色である。調整は回転ナデで外面底部は板状圧痕がある。150は白磁平底皿で、口径9.4cm、器高2.3cm、底径2.5cmを測る。胎土は灰白色で、釉薬は灰白色～灰黄色を呈している。151は瓦玉である。径6cmを測る。胎土と釉薬は灰白色を呈している。白磁椀の底部を打ち欠いて加工している。152はII区2面118出土の白磁椀である。口径16.6cm、器高6.7cm、底径7.3cmを測る。胎土と釉薬は灰白色を呈している。153・154は2面包含層出土である。153は土師器皿で、口径10.6cm、器高2.8cm、底径6.4cmを測る。胎土は石英・長石粒を少量含む。色調はにぶい黄橙色を呈している。調整は回転ナデで、外面底部は回転糸切りである。154は白磁高台付鉢か。口径11.8cm、器高6.9cm、底径5cmを測る。胎土と色調は白色を呈している。輪花になっており、内面体部に白い縦筋が入っている。

4) 瓦(第25図)

155は平瓦である。I区2面の遺構検出の際に出土した。最大残存長20cm、幅17cm、厚さ1.9cmを測る。凹面に文字があり、押印によるものと思われる。156は丸瓦である。井戸048井筒から出土した。最大残存長8.5cm、幅8.6cm、厚さ2.9cmを測る。凹面に布目痕、凸面に格子目叩き痕がある。157は平瓦である。土坑112から出土した。凹面に布目痕、凸面に格子目叩き痕がある。

5) 土製品(第26図)

158～160は土錘である。158はII区1面060から出土した。最大残存長5cm、幅1.2cm、孔径0.3cmを測る。胎土は精緻で、色調は黒褐色を呈している。159はI区1面038から出土した。最大残存長5.5cm、幅1.2cm、孔径0.3cmを測る。胎土は精緻で、色調はにぶい黄橙色を呈している。160は井戸048掘方から出土した。最大残存長5.2cm、幅2.9cm、孔径0.95cmを測る。胎土は石英や長石を含む。色調は橙色～灰褐色を呈している。161は有孔円盤である。井戸063井筒から出土した。最大残存長2.5cm、幅2.4cm、厚さ0.9cmを測る。胎土は精緻で、色調はにぶい橙色を呈している。162は土製の遊具である。I区2面049から出土した。径1.9cm、厚さ0.4cmを測る。胎土は精緻で、色調は白色を呈している。163は土玉である。最大残存長2.3cm、厚さ1.9cmを測る。色調は橙色を呈している。164は土鈴である。I区1面遺構検出の際に出土した。最大残存長3.8cm、幅2.8cm、厚さ2.5cmを測る。胎土は精緻で、色調は浅橙色を呈している。165は土製円盤である。土坑091から出土した。最大残存長7cm、厚さ1.45cmを測る。胎土は石英・長石を含む。色調は橙色を呈している。166は土製の鋳型?である。井戸063井筒から出土した。最大残存長9cm、幅5.4cm、厚さ2.7cmを測る。胎土は石英・長石・雲母を少量含む。色調は浅黄色を呈している。

6) 石製品（第27図）

167～170は砥石である。167はⅡ区1面包含層から出土した。最大残存長13.5cm、幅14.3cm、厚さ3.9cmを測る。色調は灰黄色を呈している。ほぼすべての面に擦痕・敲打痕・研磨痕がある。168はⅡ区1面包含層から出土した。最大残存長10.1cm、幅9.4cm、厚さ5.1cmを測る。色調はにぶい赤褐色を呈している。表面に擦痕・使用溝痕がある。裏面も若干擦れています。169は井戸063井筒から出土した。最大残存長12.7cm、幅7.5cm、厚さ4.7cmを測る。色調はにぶい褐色を呈している。両面に擦痕があり、側面に敲打痕がある。170は井戸063掘方から出土した。最大残存長9.7cm、幅7.4cm、3.9cmを測る。色調は灰黄色を呈している。表面と左側面に磨痕と研磨痕がある。171は有孔石錘である。井戸063から出土した。最大残存長5.2cm、幅3cm、厚さ1.5cmを測る。色調は黒色を呈している。172は滑石製石鍋の口縁部破片である。井戸037から出土した。最大残存長5cm、幅6.7cm、厚さ2.4cmを測る。外間にノミ痕がある。173は用途不明の石製品（滑石製石鍋の転用）である。井戸037から出土した。最大残存長5.5cm、幅5.1cm、厚さ1.8cmを測る。滑石製石鍋の胴部片を小片にして中央に3.3×3.1cmの大きさに穿っている。

7) 玉製品（第28図）

174・175は心棒に巻き付けられた状態で分割される前のものである。Ⅱ区1面070から出土した。174は径0.65～0.7cm、孔径0.35cmを測る。色調は青と白のマーブルを呈している。175は径0.65cm、孔径0.3cmを測る。色調は青と白のマーブルを呈している。176は管玉である。Ⅰ区1面から出土した。最大残存長1.3cm、径0.45cm、孔径0.2cmを測る。色調は青灰色を呈している。177は小玉である。Ⅱ区1面061から出土した。最大径1.7cm、厚さ0.6cmを測る。色調はオリーブ色を呈している。

第3章　まとめ

今回の調査地点における検出遺構は、第1面に井戸1基、土師器の廃棄土坑、柱穴、ピットである。第2面では井戸2基、土坑3基、ピットである。これまでの博多遺跡群の調査と同様に数多くの遺構が切りあっており、遺構の密度非常に濃かった。

井戸は合計で3基検出した。第2面で検出された井戸048、井戸063では井筒が二つ見つかっており、ほぼ同位置にて作り直しが行われたものと考えられる。ただ平面及び断面においてもその新旧を明らかにできなかった。出土遺物を見る限りでは大きな時期差はないものと考える。出土遺物から井戸037は13世紀初頭？、井戸048、井戸063は11世紀後半から12世紀中頃と思われる。

第1面で検出された土師器の廃棄土坑では数多くの土師器がまとめて出土しており、一括資料としての重要なものである。これらの土師器皿は口径が7cm～8.9cmの間に、壺は概ね12cm前後でまとまっている。ただ底部外面の調整が糸切りのみと糸切りのち板状圧痕を行っているものの2つが存在している。これらのことからこの土師器の廃棄土坑の時期は13世紀代と考えられる。

以上のように、本調査地点では古代末から中世までの遺構や遺物を検出し、中世都市「博多」の集落様相の一端を確認することができた。ただ博多遺跡群内での本調査地点の意義付けまでは行うことできなかった。今後周辺の調査の進展を待って改めて考えてみたい。

図版 1

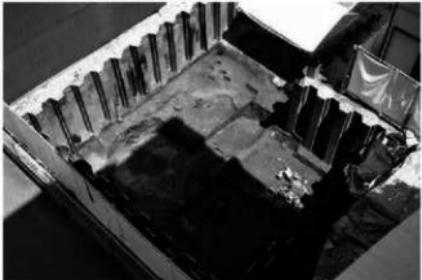


写真1 I区1面全景（西から）



写真2 I区2面全景（南西から）



写真3 II区1面全景（南東から）



写真4 II区2面全景（南東から）



写真5 井戸 037（北東から）



写真6 井戸 048（南東から）

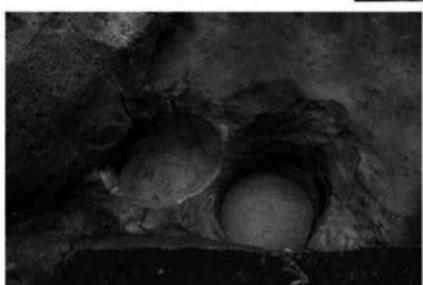


写真7 井戸 063（北東から）



写真8 土坑 091（西から）

図版 3



写真9 土坑091 土師器皿 (1)



写真10 土坑091 土師器皿 (2)

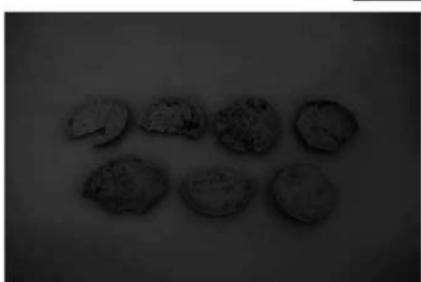


写真11 土坑091 土師器皿 (3)



写真12 土坑091 土師器壺



写真 13 井戸 048 出土土器



写真 14 井戸 063 出土土器



写真 15 井戸 068 出土土器



写真 16 土坑 101 出土土器

報告書抄録

ふりがな	はかた 164						
書名	博多 164						
副書名	—博多遺跡群第214次調査の報告—						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1370集						
編著者名	山本晃平						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号 TEL 092-711-4667						
発行年月日	2019年3月26日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 33° 35' 42"	東経 130° 24' 41"	発掘期間 20170630 ~ 20171003	発掘面積 m ² 92	発掘原因 記録保存調査
はかたいせきぐん 博多遺跡群	ふくおかげんふくおかし 福岡県福岡市 はかたくれいせんまち 博多区冷泉町 446、448	40137	121				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
博多遺跡群 第214次調査	集落	古代末～中世	井戸3基 土師器廃棄土坑 土坑3基	土師器、須恵器、陶 磁器、石製品、瓦	古代末～中世前半期の 集落跡		
要約	本調査地点は博多遺跡群中央部に位置している。井戸3基と土師器の廃棄土坑、土坑3基を検出した。古代末から中世までの博多の集落構造の一端を明らかにすることができた。						

博多164

—博多遺跡群第214次調査の報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1370集

2019年（平成31年）3月26日

発行 福岡市教育委員会
福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号
印刷 高松印刷有限会社
福岡県福岡市東区松島1丁目4-10

